

2013年(平成25年)3月3日(日曜日)

楽請楽書

歴史時代小説

戊辰戦争に自軍の医師として従軍するも、敵味方の区別なく治療した蘭医は、司馬 翠太郎「胡蝶の夢」なども取り上げられた有名な医師である。吉田 邦一「角川春樹 筆

跡新：16880円)は、この蘭医を妻あいの視点で描いている。

「蘭医の農家の娘として生まれたあいは、蘭字書で秘巻を開いている父の兄、蘭代輔の長年に織織りを習ったことをきっかけに、2人の妻子になつてい

た蘭医と出会う。やがてあいは、左負頼天皇で蘭方医学を学んだ寛斎と結婚、東海の濱口梧陵の援助で長崎に留学し、徳島藩の御医になつて、蘭術を金もつひやお出世の手段にしなかつた寛斎を支えていく。

「面頬から教わつた蘭実剛健の精神を忘れず、貧しい人からは治療費を取らず、明治政府に要請を提示されながらも蘭の根に生きた寛斎。津波を防ぎ堤防の建設や人材育成といった社会事業におしげもなく大金を使った梧陵。本書には人としての頭、上立つ者の真摯を重んじた人たちが数多く出てくる。



「あひ」

松本 信子 著 「神と語り」

隠岐の農民蜂起題材に

その無私を賞いた寛斎は生きまは、激しい競争にさらされ、両首をいたわる心を忘れがちになっている現代人に、本当に大切なことを思い出させてくれるのではないだろうか。

何より、代表作「みつくし料理帖」のヒロイン澤と同じように、どれだけ困難な状況に陥つてもボクッパな思考を失わず、激励の早米を乗り越えていったあいの明るく前向きな姿は、すべての読者に生きる勇気を与えてくれるはずだ。

松本信子「神と語り」(光文社・1890円)は、隠岐島で農民が蜂起、松江藩士を追放し自治政

府を作つた史実を題材にしている。後醍醐天皇が流された隠岐島は幕府派の農民が多く、幕末になると佐幕派の松江藩と対立していた。不作なのに年貢を取り立て、農民をめぐる政變に一旦性がない松江藩への不信感を募らせていった農民は、王政復古を機に立ち上がる。だが信頼していた新政府が、松江藩に隠岐島の支配権を認めためたため、激しい戦闘になつてしまう。

短期間ながら自治を行つた隠岐島の農民は、小さな力でも結果すれば政治を動かせる事実を教えてくれるが、中央集権化を進める新政府の思惑で、シゴを外される終極は、地方分権が進まない日本の原動力を削がしているように考えさせられる。

(木蘭書己・文芸評論家)